

1. さて、過越の祭りの前に、

この世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来たことを知られたので、世にいる自分のものを愛されたイエスは、その愛を残るところなく示された。

2. 夕食の間のことであった。

悪魔はすでにシモンの子イスカリオテ・ユダの心に、イエスを売ろうとする思いを入れていたが、

3. イエスは、父が万物を自分の手に渡されたことと、ご自分が父から来て父に行くことを知られ、

4. 夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。

5. それから、たらいに水を入れ、弟子たちの足を洗って、腰にまっとうられる手ぬぐいで、ふき始められた。

6. こうして、イエスはシモン・ペテロのところに来られた。

ペテロはイエスに言った。

「主よ。あなたが、私の足を洗ってくださるのですか。」

7. イエスは答えて言われた。

「わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。」

8. ペテロはイエスに言った。

「決して私の足をお洗いにしないでください。」

イエスは答えられた。

「もしわたしが洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もありません。」

9. シモン・ペテロは言った。

「主よ。わたしの足だけでなく、手も頭も洗ってください。」

10. イエスは彼に言われた。

「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。

全身きよいのです。

あなたがたはきよいのですが、みながそうではありません。」

11. イエスはご自分を裏切る者を知っておられた。

それで、「みながきよいのではない。」と言われたのである。

12. イエスは、彼らの足を洗い終わり、上着を着けて、再び席に着いて、彼らに言われた。

「わたしがあなたがたに何をしたか、わかりますか。」

13. あなたがたはわたしを先生とも主とも呼んでいます。

あなたがたがそう言うのはよい。

わたしはそのような者だからです。

14. それで、主であり師であるこのわたしがあなたがたの足を洗ったのですからあなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。

15. わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。

16. まことに、まことに、あなたがたに告げます。

しもべはその主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさるものではありません。

17. あなたがたがこれらのことを知っているのなら、それを行なうときに、あなたがたは祝福されるのです。

8. ペテロはイエスに言った。

「決して私の足をお洗いにしないでください。」

Ouvnh niyhi mou touj podaj **ej ton aiwta**

イエスは答えられた。

「もしわたしが洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もありません。」

Vhsouj autw

Ean **nh niyw** se(ouk ecej **neroj** metVemouA

niptw aor.

wash, make morally clean, wash the feet, show hospitality; humbly serve

neroj: 領域、領土、地方、部分、分け前、報い、相続、

~の側、派、分派、グループ、政党、

しばらくの間、この場合、成分、商売、貿易、取引

15. わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。

upodeigna gar edwka uimiñ iha kaqwj egw. epoihsa uimiñ kai. uimeij poihteA

upodeigna(1) in a pos. sense, as someth. to be imitated *example, model* (JN 13.15);

(2) in a neg. sense, as someth. to be avoided *a (warning) example* (2P 2.6);

(3) as a representative copy or likeness of what is original and genuine *imitation, image* (HE 8.5).

説教

今週は受難週です。

イエスさまは、私たちの身代わりに十字架で死なれて、私たちの罪を贖ってくださいました。

イエスさまが罪深い私たちの身代わりに十字架で死んでくださったことによって、

イエスさまを信じる私たちは、神の怒りとさばきを免れて永遠のいのちにあずかることができます。

私たちが罪と地獄の滅びから救われるのに必要なのは、お金でも地位でも学歴でも品性でもありません。

私たちが救われるのに必要なのは、信仰です。

イエスキリストを信じる信仰です。

誰でも、イエスさまを救い主と信じて、救われるのです。

この永遠の福音を、

イースターまでのこの一週間、特に思い出しながら、

神さまに感謝を捧げ、喜んで神と人を愛して生活していきたいと願います。

さて、冒頭のみことばは、イエスさまが十字架で死なれる前日、最後の晩餐の席で弟子のペテロに語られたみことばです。

夕食の際、

イエスさまは食事を中断し、

夕食の席から立ち上がって、

上着を脱ぎ、

手ぬぐいを取って腰にまとい、

たらいに水を入れ、

弟子たちの足を洗っては腰にまとっている手ぬぐいで拭き始められました。

あっけにとられながら、ただ呆然と、弟子たちはされるがままにイエスさまに足を洗ってもらいます。

そういう中、ペテロは単純率直に自分の驚きを告白します。

6 . こうして、イエスはシモン・ペテロのところに来られた。

ペテロはイエスに言った。

「主よ。あなたが、私の足を洗ってくださるのですか。」

するとイエスさまは言われます。

7 . イエスは答えて言われた。

「わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。」

ペテロは思わず嘆願します。

8 . ペテロはイエスに言った。

「決して私の足をお洗いにならないでください。」

この直訳は、「決して、永遠に、私の足を洗わないでください。」となるので、

イエスさまが弟子のペテロの足を洗うという行為がペテロにとってどんなにショックで驚きであったかが伝わってきます。

しかし、イエスさまは言われたのです。

8 後 イエスは答えられた。

「もしわたしが(あなたを)洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もありません。」

足を洗うという行為は、東洋の家庭の習慣では奴隷の仕事でした。

ダビデが、自分の妻として迎え入れたいということを伝え聞いたアビガイルは、地にひれ伏してこう言いました。

「まあ。このはしのためは、ご主人さまのしもべたちの足を洗う女奴隷となりましょう。」(サムエル 25:41)」

このように、足を洗うことは、主人の仕事ではなく、奴隷の仕事でした。

最も卑しく身分の低い奴隷の仕事です。

そして、その奴隷の仕事を、イエスさまは弟子たちになさったのでした。

イエスさまがこれからローマ帝国に反旗を翻しユダヤ独立を成し遂げて地上の王に君臨なさることを夢見ていた弟子たちは、自分たちの中で誰がイエスさまに次ぐナンバーツーになるか、我こそ右大臣にならんと実に浅ましいつばぜり合いをしていました。

ですから、人より偉くなりたい、他人を出し抜いて人の上に立ちたいと野心満々の弟子たちにとって、

身をかがめ、身を低くし、しもべとなって弟子たちの足を洗われたイエスさまの姿はあまりに衝撃的でした。

8 . イエスは答えられた。

「もしわたしが(あなたを)洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もありません。」

「関係」と訳されている言葉は、

「領域、領土、地方、部分、分け前、報い、相続、

~の側、派、分派、グループ、政党、商売、貿易、取引、しばらくの間、この場合、成分」といった意味があります。

ですから、「あなたはわたしと何の関係もありません」は次のように訳することも可能です。

「あなたはわたしとの間に領土を持たない。」

「あなたはわたしとの間に相続地を持たない。」

「あなたはわたしとの間にグループを持たない。」

「あなたはわたしとの間に取引がない。」

それで、結局はこれらを端的に意識すると、「何の関係もない」となるのでしょう。

すなわち、このイエスさまのみことばによると、

「イエスさまがペテロの足を洗う」というそのことが、イエスさまとペテロの関係となるということになります。

「イエスさまがペテロの足を洗って」こそ、ペテロにイエスさまとの絆が生じるということになります。

同じ領土に生き、同じグループに属して、生きた交流をなす絆となるのです。

イエスさまがペテロの足を洗う、それこそがイエスさまとペテロの関係であったのです。

このことを一般化すると、

イエスさまが弟子たちに仕える、そこにイエスさまと弟子たちとの関係の本質があったのでした。

ですから、

もしもペテロの要求通りイエスさまがペテロの足を洗わないならば、ペテロはイエスさまとの関係を失ってしまうことになります。

イエスさまは、

ご自身が世に来られた目的を、

「人に仕え、自分を犠牲にして彼らを救うため」だと説明なさいました。

「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、

また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。」 マルコ 10:45

そして、イエスさまは、人の先に立ちたいと願う者は人に仕える者になるよう勧めました。

「あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。」 マタイ 20:26

「あなたがたのうちの一番偉大な者は、あなたがたに仕える人でなければなりません。」 マタイ 23:11

「だれでも人の先に立ちたいと思うなら、みなのがりとなり、みなに仕える者となりなさい。」 マルコ 9:35

「あなたがたの間で一番偉い人は一番年の若い者のようになりなさい。

また、治める人は仕える人のようでありなさい。」 ルカ 22:26

イエスさまのみことばの通りです。

偉大な者こそ、人に「仕える」ものです。

例えば、この世界で最も偉大な方のことを考えてみましょう。

みなさん、この世界で最も偉大なお方は誰でしょうか？

それは言うまでもなく父なる神さまです。

この天地万物を造られた父なる神さまは、この世界で最も偉大なお方です。

天の父は、この天と地をお造りになり、全世界を支配しておられます。

その天の父が、私たちに生きるいのちを与えてくださいます。

生きとし生けるすべての物を暖める太陽を昇らせてくださいます。

恵みの雨を降らせてくださいます。

私たちが生きるのに必要な糧を、日々、毎日毎日、そして今日も与えてくださいます。

そうやって、私たちを生かしてくださるのです。

私たちを養ってくださるのです。

また、人の親のことを考えてみましょう。

親と子のことを考えたら、どちらが偉いでしょうか。

当然、親です。

どうして親の方が偉いのでしょうか？

それは、親のおかげで子どもが育つからです。

つまり、親の方が子どもに「仕える」故に、子どもより偉いのです。

親は、自分の子を慈しんで、生まれた時から乳を飲ませます。

しもの世話をしてあげます。

遊んであげます。

教育します。

そうやって、ひたすら自分の子のために仕えるのです。

小さい時は、一時も目を離すことなく、ずうっと付きっきりで我が子の面倒を見ます。

大きくなったら大きくなったで、子どもの勉強をどうするか、学費の工面に心砕き、子どもの将来を考えてあれこれ世話をします。

子どもは親のため祈らなくても、親は子どものために毎日祈ります。

だから、偉いんです。

親の方が偉いんです。

それは、子どもに「仕える」から、偉いんです。

すなわち、「仕えて」もらうよりも、「仕える」方が偉いんです。

イエスさまが言われるように、「偉い人」ほど人に「仕える」ものなのです。

人に「仕える」ということが、「偉大な者」のしるしです。

人に「仕える」ということが、「先に立つ者」のスタイルです。

人に「仕える」ということが、「治める者」のすなわち「リーダー」「指導者」「先生」「教師」たる者の基本的なスタイルなのです。

「仕える」ことが、「権威」であり「権力」の行使なのです。

本当に「権威のある者」は人のために「仕え」ます。

そのための「権威」であり「権力」なのです。

ですから、イエスさまも、「仕える」生涯を生きられました。

幼い時は、ナザレで「両親に仕えられた」とあります。（ルカ 2:51）

公生涯に入られるや、イエスさまは行く先々で悩める人々を助けられました。

悪霊憑きからは悪霊を追い出し、病人を癒し、罪人たちを教えて人々に「仕え」ました。

来る日も来る日も、朝から晩まで、否、夜中にも容赦なく押し寄せてくる人々の救いのために、休みなく「仕え」ました。

イエスさまは弟子たちにも仕えました。

ペテロの姑を癒してあげました。

嵐を沈めて、弟子たちの舟を助け出しました。

弟子たちに、道を歩く時も、食事をする時も、いつも真理のみことばを教えました。

食事の席では、弟子たちに仕えて給仕なさいました。

そして、最後は、十字架で死なれて弟子たちの罪を贖い、彼らにご自身のいのちをお与えになりました。

そうやって、彼らの魂を地獄の滅びから救い出されたのです。

このように、イエスさまは、弟子たちに「仕える」生涯を生きられました。

イエスさまは、このように弟子たちに仕えてくださったのです。

父なる神さまは、今も生きて働いて、私たちに仕えてくださっています。

私たちは、父なる神さまとイエスさまに「仕えて」いただいて、こうして生かされているのです。

私たちは、父なる神さまとイエスさまに「奉仕して」いただいて、生かされているのです。

ならば、私たちはどう生きるべきでしょうか。

私たちも、「仕えて」、生きるべきではないでしょうか。

神と人に「仕えて」生きるべきではないでしょうか。

私たちにより「偉い」イエスさまが

「仕える」しもべの道を示してくださったように、私たちも「仕える」しもべの道を歩んでいくべきではないでしょうか。

感謝して、喜んで「仕える」べきではないでしょうか。

9節を見ると、ペテロが「足だけじゃなくて、私の手も頭も、全身を洗ってください」と言うのに対して、

イエスさまは、「全身洗うことは必要ない、足だけで充分、すでに全身が聖い」とお答えになっています。

つまり、ここでイエスさまが弟子の足を洗う行為は、

罪の洗いを意味する洗礼の儀式を行っているのではなくて、単に「仕える」模範を示したに過ぎないと言うわけです。

それで、12節以降を見ると、仕える「模範」すなわち「サンプル、モデル、イメージ、型」を示したとっておられます。

「わたしが何をしたかわかりますか、

あなたがたはわたしを先生とも主とも呼んでいます。

あなたがたがそう言うのはよい。

わたしはそのような者だからです。

それで、主であり師であるこのわたしがあなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。

わたしがあなたがたにしたとおりにあなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。」

つまり、人に「仕える」ということが、イエスさまが弟子たちに望まれる「型」なのです。

イエスさまは弟子たちに「仕えた」し、弟子たちが「仕える」ことを願っておられるのです。

人の泥だらけの汚い足を洗って、「仕える」ことを願っておられるのです。

イエスさまは、

みことばの教師となる者に、教会の奉仕者である役員に、そして信徒ひとりひとりに「仕える」者となることを願っておられます。

一家の主人となる者に、「仕える」者となることを願っておられます。

職場を治める者に、「仕える」者となることを願っておられます。

学校の教師となる者に、「仕える」者となることを願っておられます。

国の支配者となる者に、「仕える」者となることを願っておられます。

人を支配するのではなく、人に「仕える」者となることを願っておられます。

高飛車に人を支配するのではなく、身を低くして人に「仕える」よう願っておられるのです。

イエスさまが言われるように、そして模範を示されたように、

ここに集う私たちは、「仕える」ということを、私たちキリスト者の基本的な生き方をしていきたいと願います。

ここに集うみなさんひとりひとりが、神さまに愛され、仕えてもらっていることに心から感謝し、

教会で、家庭で、学校で、職場で、地域で、そして遣わされていく国々に於いて、喜んで神と人に仕えて生かされるよう祈ります。